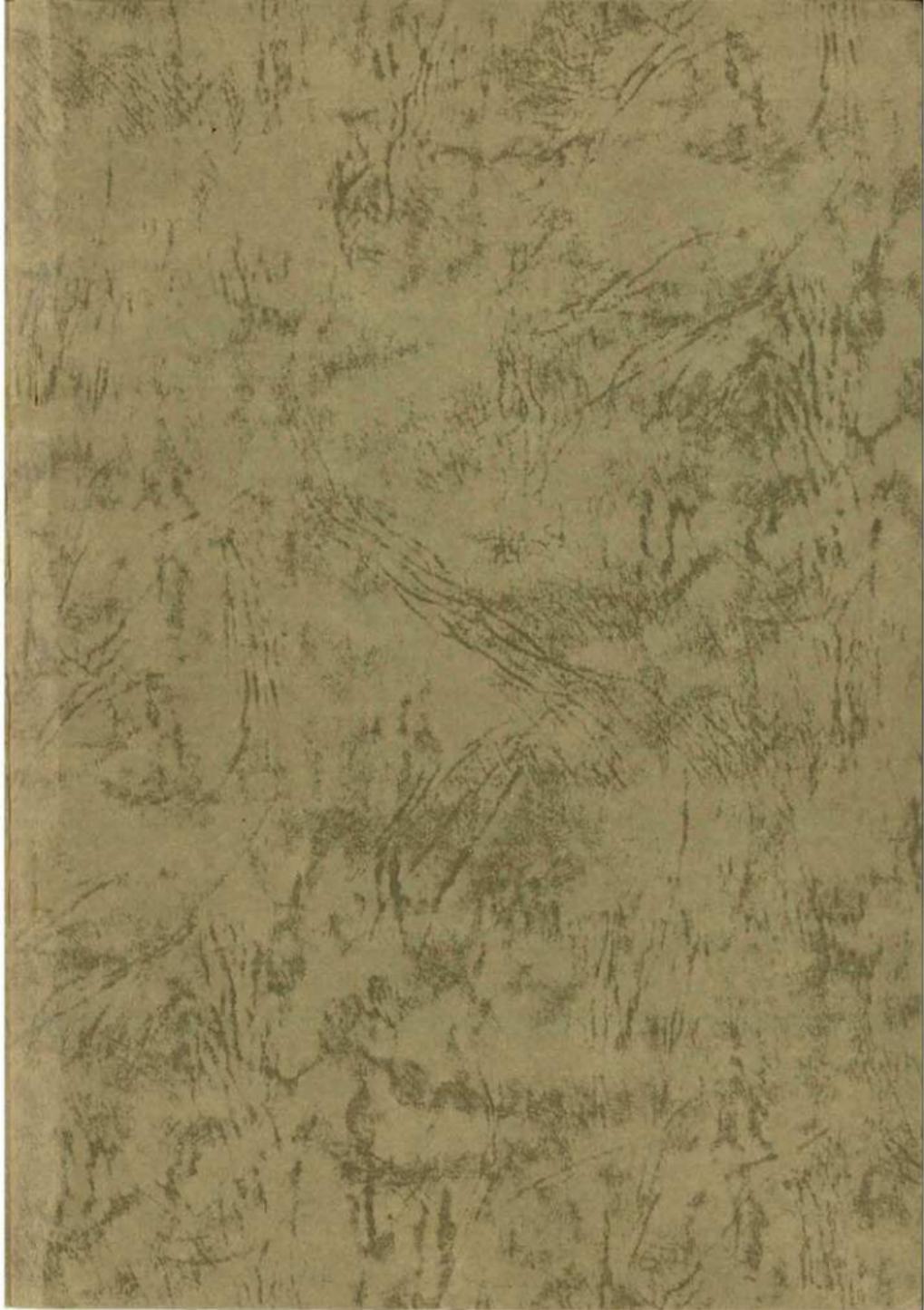


(財)八尾市文化財調査研究会報告 5

## 昭和58年度事業概要報告

1984年

(財)八尾市文化財調査研究会



## 昭和58年度 事業概要報告

## 正 読 表

頁	行	説	正
埋藏文化財 分布図	高安山古墳群	開山寺	開山塚
同 上	成法寺遺跡南側 の周知の遺跡		龍蓋寺跡
27	1	第14次調査 <sup>V</sup>	店舗建築に伴う 発掘調査
同 上	12	隅丸方式	隅丸方形
38	6	柄六	枘六
52	14	完成品	完形品
54	18	太田川	太田川

## はじめに

八尾市は古来より多くの人々が生活してきた地域で、先人の残した生活の跡を偲ぶことのできる文化遺産は、何事にもかえ難いものであり、後世に伝えるべき国民共有の貴重な財産であります。

これらの認識の上に立って、昭和57年7月1日付で、財団法人八尾市文化財調査研究会を設立し、開発申請者のご理解とご協力を得て、埋蔵文化財の発掘調査とその保存に努め、更には一般文化財に関する講座等をも開催し、文化財に関する啓蒙普及に観念努力をいたしているところであります。

本書は昭和58年度の事業の概要を収録したものであります。わずかでも市民の皆様をはじめ、ご協力をいただいている関係各位に寄与できれば幸せに存じます。なお、本書作成にあたってご協力、ご教示いただいた各位に感謝の意を表します。

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 山脇 悅司

## 例　　言

1. 本冊子は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、昭和58年度に実施した事業の概要をまとめたものである。
1. 本冊子作成にあたっては、成海佳子・原田昌則が企画・編集した。なお、埋蔵文化財の発掘調査の項については、高萩千秋・成海・原田・西村公助・駒沢敦の調査概要をもとに、成海・原田が編集した。
1. 本冊子掲載の地図は、八尾市発行の2500分の1の地図（昭和47年測量）を使用した。
1. 本冊子で用いた高さの基準は東京湾の平均海面であり、TPと略して記載している。

## 目　　次

### はじめに

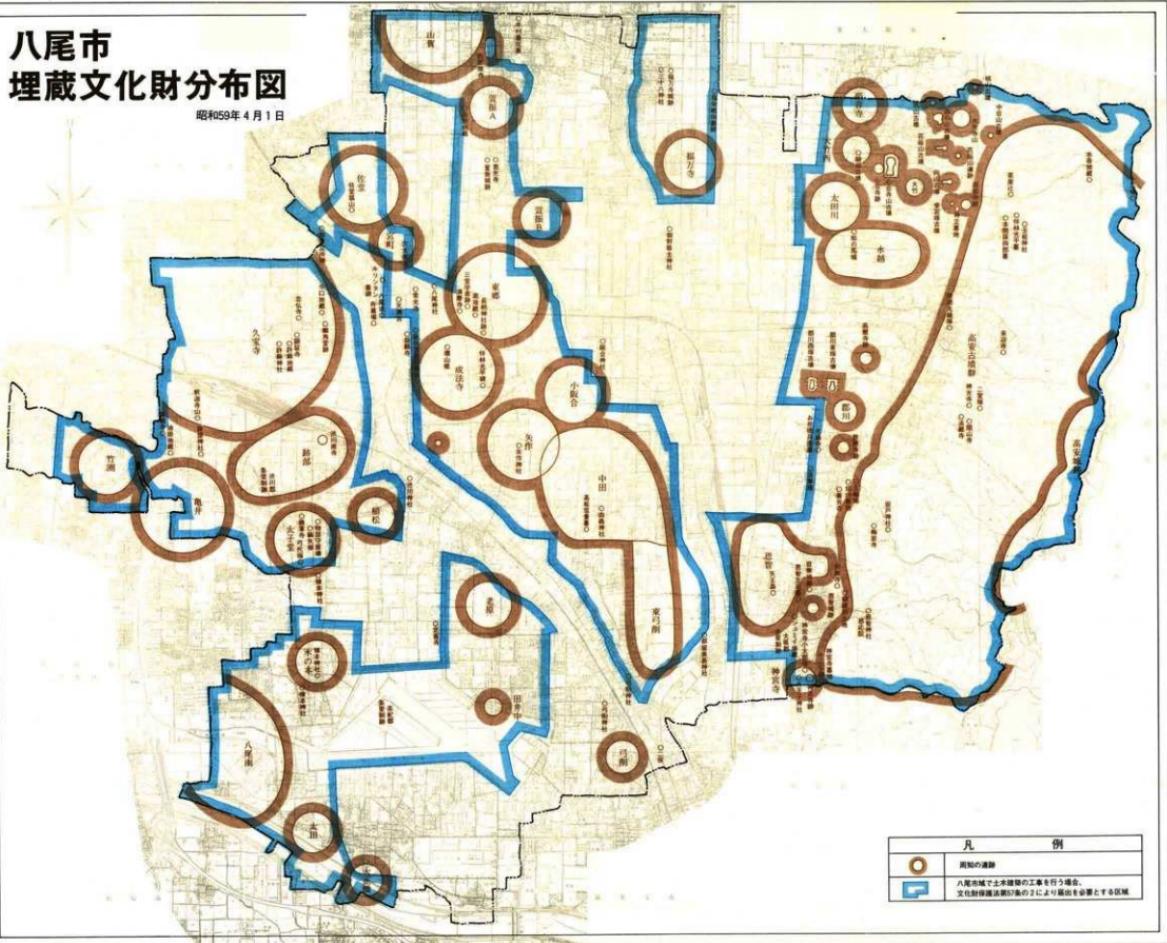
#### 例言

#### 遺跡分布図

I 埋蔵文化財の発掘調査概要報告	1
1 木の木遺跡	2
2 東郷遺跡	26
3 八尾南遺跡	34
4 太子堂遺跡	37
5 小阪合遺跡	40
6 成法寺遺跡	44
7 楽音寺遺跡	46
8 中田遺跡	49
9 蹄部遺跡	51
II その他の事業	53

# 八尾市 埋蔵文化財分布図

昭和59年4月1日



# I 埋蔵文化財の発掘調査概要報告

昭和58年度に財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の件数は23件を数え、総調査面積は16,283m<sup>2</sup>に及んでおります。

これらの調査結果については、早急に各遺跡ごとに報告書を刊行し、成果の公開に努めるべきでありますが、何分に日々増加する開発事業等の発掘調査に大方の時間を費やし、その責を果たし得ないことは、まことに遺憾に思っております。勿論、調査結果の公開は、発掘担当機関の責務であり、いたずらに整理・研究を停滞させてはならないと考えております。

従って、この「埋蔵文化財の発掘調査概要報告」は、このような趣旨にもとづいてその概略をまとめたものでありますので、八尾市内の発掘調査の状況を少しでもご理解いただければ、幸せに存じます。

## 昭和58年度発掘調査一覧表

遺跡名	調査地	委託者	原 因	面積	期 間	担当者	備 考
1 木の本 木の本の木無番地 (八尾空港内)	遺跡名	地主	排水路整備	1130	昭和57年 4月1日～3月25日	高田・西澤 西村・木田	
	第一遺跡	日本森林 ヒヨコグマ一族	防護柵	225	7月22日～25日 7月14日～15日	木 田	
	緊急航空施	*	*	160	6月11日～14日	*	
	昭和航空施	*	*	25	6月14日～15日	*	
	第5空港	鐵道	*	36	6月16日～17日	*	
	第6空港本館	アメナリ 空港ターミナル 第一航空施	飛行場 飛行場 飛行場	180 260 200	7月9日～15日 9月5日～8日 9月26日～10月1日	*	志紀郡条里町跡の調査
	日本海空港施	事務所	*	100	10月5日～7日	*	
	東京国際航空施	防護柵	*	100	10月11日～12日	*	
	新日本空港施	*	*	30	10月18日～19日	*	
	東西国際空港 北ヒヨコグマ一族	ビル	*	176	6月10日～18日	高 稲	2箇所西方の獨立柱建物を検出
	木の本の木無番地13	住宅住跡	*	480	3月18日～4月21日	*	
	光町1丁目72	田中一任	店舗	300	5月13日～5月25日	*	
2 東 塚	北本町2丁目136	太陽生命保険施	ビル	200	8月1日～8月13日	*	
	光町1丁目60・ 北本町2丁目136	本村商店	*	480	11月24日～12月15日	駒 沢	東寺遺跡初の墓域を検出
	光町1丁目47	第一生命保険 相馬会社	*	1344	昭和57年 10月27日～11月2日	*	
3 八尾南	竹林町3丁目27	コトコト舗	倉 庫	2600	2月28日～6月6日	*	
4 太子堂	東太子2丁目11番	東洋種苗園	マンショ	3393	6月6日～10月27日	*	
5 小阪合	青山町1丁目4・ 3丁目の一部	八尾市	区域整理	390	6月21日～7月14日	高 稲	
	青山町4丁目1・ 5丁目の一部	八尾市	*	1344	昭和57年 10月27日～11月2日	*	
6 成法寺	清水町2丁目2	八尾市	税 倉	220	7月8日～30日	*	
7 東寺寺	東寺町236-1	医療法人貞会	污水処理槽	234	8月23日～10月3日	*	平安時代の石組井戸を検出
8 中 田	八尾木4丁目1	八尾市	ヨミウリライ センター	220	昭和57年 2月2日～10日	山 本	
9 路 部	路部本町2丁目45	津川治	社販室	500	2月1日～31日	山本・木田	

## 1 木の本遺跡（志紀郡条里制跡）

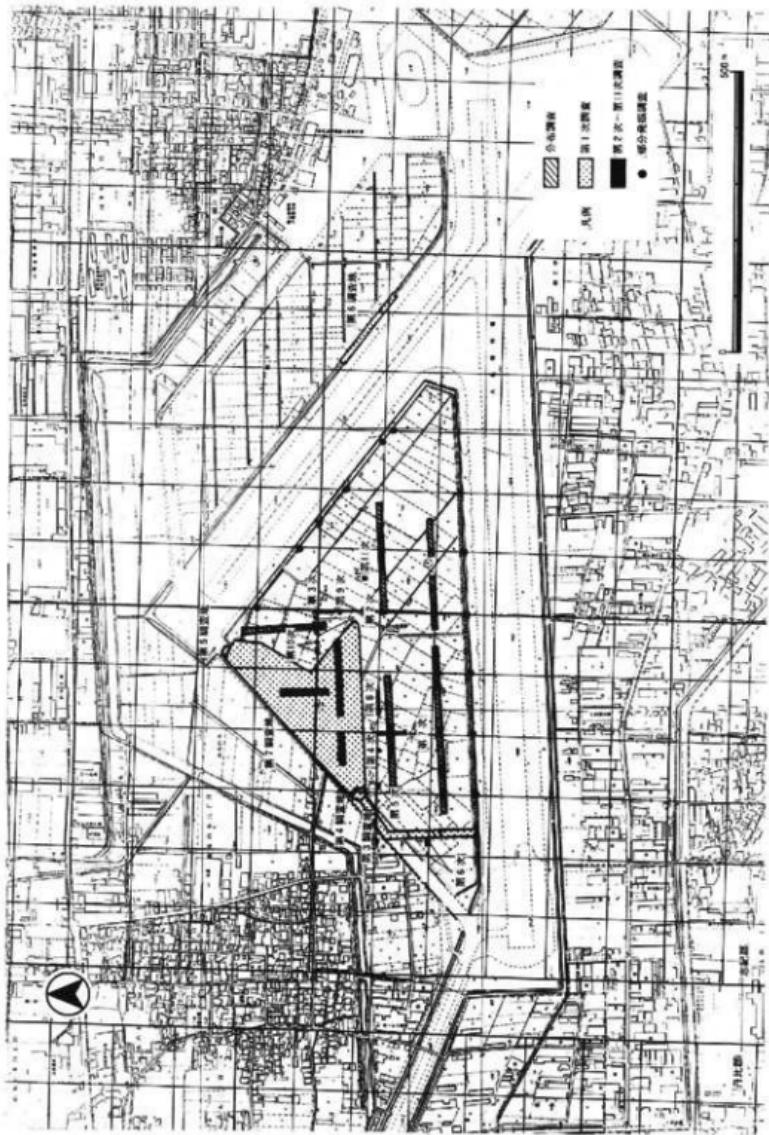
木の本遺跡は、八尾市南西部の木の本・南木の本付近一帯に所在する。当遺跡は、昭和56年3月に八尾市教育委員会が実施した南木の本4丁目における発掘調査で、弥生時代から古墳時代の集落が発見されたことで、その実態が明確になった遺跡である。その後、昭和58年2月に(財)八尾市文化財調査研究会が実施した木の本1丁目の発掘調査では、平安時代の集落が検出され、当遺跡が平安時代にも集落として存続していることが明らかとなった。

一方、これらの調査地に隣接する八尾空港内では、整備事業に先立って埋蔵文化財の状況を把握する目的で、昭和57年7月～12月に(財)八尾市文化財調査研究会が分布調査を実施した。その結果、空港内の地下には、ほぼ全域にわたって、近世の土地区画の溝と古代条里溝が重複して存在していることを確認した。このことから、以後の整備事業に伴う一連の工事によって破壊される埋蔵文化財について、記録・保存を行う目的で、発掘調査を実施するに至った。

なお、当遺跡内で昭和58年度に実施した発掘調査は12件を数え、そのうち八尾空港内整備事業に伴うものは11件(総調査面積5446m<sup>2</sup>)、その他の工事に伴うものは1件である。

木の本遺跡内検出遺構一覧表

第 1 次 調 査 立	第1調査区	自然河道1・近世溝	第4次調査	古代条里遺構溝・水田
	第2調査区	自然河道2・畦畔1・水田Aの南半	第5次調査	水田・近世条里遺構溝
	第3調査区	水田Aの北半・水田G・畦畔2～8	第6次調査	自然河道2・水田
	第4調査区	水田II	第7次調査	水田・近世条里遺構溝
	第5調査区	水田I	第8次調査	*
	第6調査区	S E-1～S E-4・S K-1～S K-6 S D-1～S D-11・S P-1～S P-14	第9次調査	*
	第7調査区	水田・流路1～7・近世井戸	第10次調査	古代条里遺構溝・近世条里遺構溝
第2次調査		古代条里遺構溝・近世条里遺構溝	第11次調査	*
第3次調査		近世条里遺構溝・近世井戸	第12次調査	古墳時代の孤立柱建物



八尾空港内調査地周辺図・条里坪割溝復元図

## 第1次調査 八尾空港排水路整備に伴う発掘調査

委託者：運輸省第三港湾建設局

調査面積：4130 m<sup>2</sup>（全面発掘調査のみ）

調査期間：昭和57年12月11日～昭和59年3月25日

昭和57年度から継続して調査を実施したもので、7箇所の大規模な工事区で全面発掘調査を行った。その他の小規模な工事区については、条里溝復元ラインに一致する箇所には5×5mのグリッドを設定して部分発掘調査を実施し、条里溝復元ラインに該当しない箇所であっても、掘削深度が表土下1.20mに達する地区では、隨時立会調査を実施した。部分発掘調査は11箇所、立会調査は76箇所を数える。

ここでは、各調査区ごとに全面発掘調査の概略を述べる。

### 第1調査区～第4調査区

調査対象地の東部に位置する調査区で、函渠構築予定地（第1調査区～第3調査区）および合流地上流構築予定地（第4調査区）にあたる。この調査区では、旧地表面で近世溝を検出し、表土下1.40m（TP +8.80m）付近で平安時代に埋没した水田・自然河道を検出した。

水田は、ほぼ東西・南北に伸びる畦畔によって区割されており、一筆耕地の判明したものは東西15.0m・南北20.0mの規模を有する。水田床面のレベル高はTP +8.40～8.70mを測り、全体的に北東へ傾くやかに下っている。水田は茶褐色粘土を耕作土としており、畦畔は耕作土を盛上げて構築されている。畦畔は幅50～100cm・高さ12～20cmを測り、断面は半円形ないし台形を呈し、他の同時期のものに比して大型である。中でも、第2調査区で検出した畦畔1は大型で、南側に自然河道2が流れていることからも、単に区割の意味だけではなく、堤防の役目も果たしたものと推定できる。また、畦畔1の東端はとぎれおり、この部分を水口と考えれば、自然河道2が一連の水田造構の灌溉施設として利用されていたものと理解できる。なお、自然河道2は条里復元ラインに合致していることから、条里の規制を受けて開削された可能性が考えられる。

その一方、水田や畦畔の上面には青灰色シルトが15～20cmの厚さで堆積していることから、自然河道2の氾濫によってこれらが冠水・埋没してしまったことが窺える。しかし、第3調査区で検出した2枚の水田では、青灰色シルトの上位に茶灰色粘土が堆積していることから、一旦埋没した水田に粘土を盛り、同じ区画内で耕作を行っていることが窺える。

### 第5調査区

調査対象地の北端に位置する調査区で、合流池下流構築予定地にあたる。この調査区では、南半分で水田を検出した。水田は灰色粘土を耕作土としており、床面のレベル高はTP +8.80

～8.90mを測り、多くの足跡状遺構が遺存している。水田の上面には、灰色粗砂層が<sup>†</sup>5～10cmの厚さで堆積していることから、一挙に埋没したことが窺える。また、調査区北半分は水田面より一段高くなっている、足跡もなく、未耕地と考えられる。

#### 第6調査区

調査対象地の南東部の調査区で、第1調査区～第3調査区同様、函梁構築予定地にあたる。調査の結果、調査区南西隅で弥生時代中期～古墳時代前期の遺構、他の大部分では、平安時代後期～鎌倉時代初頭の遺構が検出された。

弥生時代中期～古墳時代前期の遺構は、土坑2基・溝3条で、TP+9.70m付近の黒灰色砂質土層を構築面としている。遺構内からは、各時期の土器片が少量出土している。

平安時代後期～鎌倉時代初頭の遺構は、TP+10.10m付近の黄灰色シルト層を構築面としており、井戸4基・土坑5基・溝8条・ピット14個を検出した。遺構内からは、土師器・黒色土器・瓦器等が多量に出土している。これらの遺構内には炭・灰が多量に含まれ、遺物にも火を受けたと思われるものが多く認められ、火災によってこれらの遺構が放棄された可能性が考えられる。とくに井戸(SE-3)からは、遺存状態の良好な瓦器碗が多量に出土しており、中河内地域出土の和泉型瓦器碗の中でも最古に位置づけられるものと考えられる。

その他に、ピットも多く検出されたが、限定された調査地であるため、建物を復元するには至らなかった。また、溝の方向は、ほぼ東西・南北に限定されており、条里区画に規制されて開削されたものと推定される。

#### 第7調査区

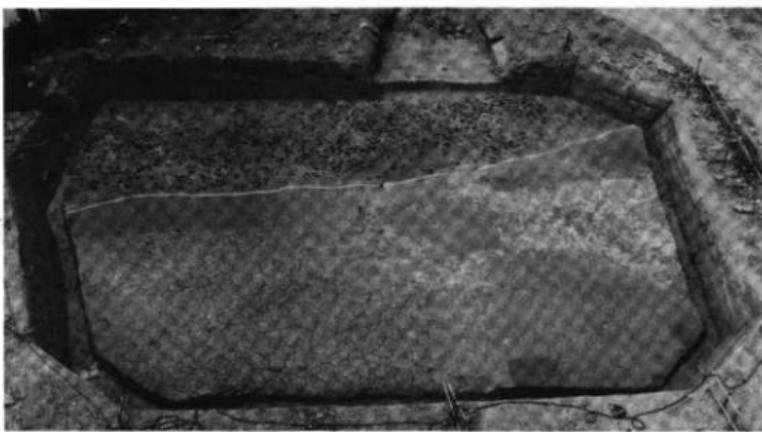
調査対象地の北西部、第4調査区・第5調査区間に設定した調整地の構築予定地にあたり、総面積は29400m<sup>2</sup>を測る。当調査地では、表土下1.20mまでの掘削に立会い、それ以下に達する排水管埋設部分にA～Zトレチを設定し、発掘調査を継続した。

調査の結果、調査区のほぼ全域にわたり、分布調査と同様表土下1.4m(TP+8.80m)で弥生時代～平安時代の遺物を含む褐色粗砂層が認められた。それ以下10cmに黄褐色粗砂または青灰色シルトが<sup>†</sup>10cmの厚さで堆積し、その下に青灰色粘土が堆積している。他の調査区の結果から、粗砂・シルトの層が洪水を起因とする堆積土であり、その下の青灰色粘土が平安時代の水田耕作土であることは明らかであるが、畦畔等の施設は確認できなかった。

その他に、河道の痕跡である粗砂の厚い堆積を6箇所で確認しており、そのうちの4箇所は条里溝復元ラインに合致している。



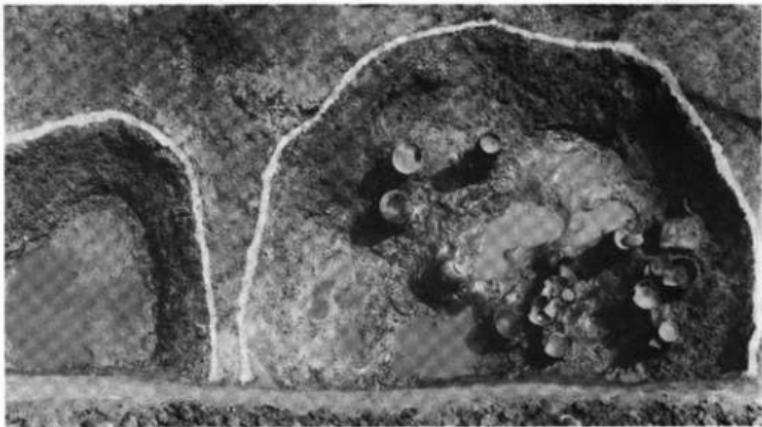
第4調査区全景



第5調査区全景



第6調査区全景



第6調査区SE-3

## 第2次調査 格納庫建設に伴う発掘調査

委託者：日本農林ヘリコプター㈱

調査面積：225m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年4月2日～25日（第1トレンチ・第2トレンチ）

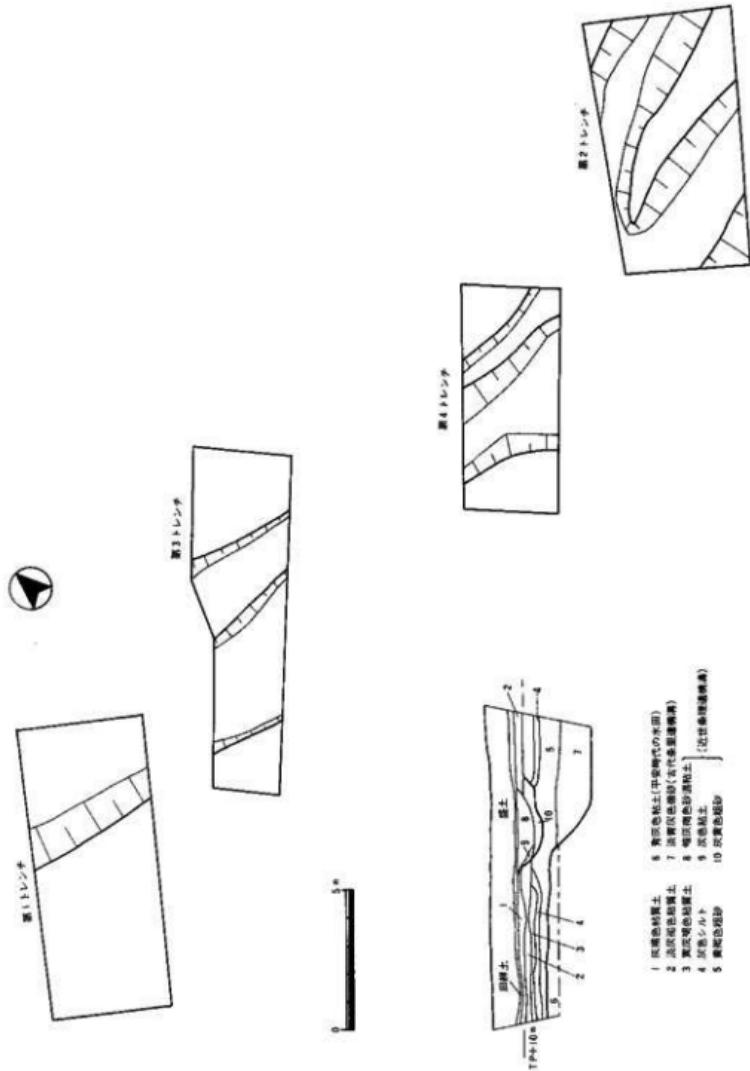
昭和58年7月14日・15日（第3トレンチ・第4トレンチ）

当初、建設予定地の西隅に第1トレンチ、東隅に第2トレンチを設定して調査を実施した結果、近世条里造構・古代条里造構溝を検出した。そのために、前記2トレンチ間に第3トレンチ・第4トレンチを設定し、基礎工事によって破壊される造構の記録保存に努めた。

各トレンチでは、TP +10.00m付近の旧地表を構築面とする近世条里造構溝を検出した。以下、表土下1.80～1.90m (TP +9.20～9.00m)付近で、河川出土である黄褐色粗砂層(平安時代の遺物包含層)に達する。古代条里造構溝は、この層の20～30cm下の青灰色粘土層上面を構築面としており、東西の流路を持つ。この溝は分布調査第5トレンチで検出した溝の東の延長にあたる。幅4.00～6.50mを測り、深さは1m以上でも底部を確認するには至らなかった。溝内には淡青灰色微砂が堆積し、弥生時代から平安時代に至る雑多な遺物を含んでいる。なお、この溝は、近世条里造構溝と重複している。



トレンチ全景



トレンチ断面図

### 第3次調査 格納庫建設に伴う発掘調査

委託者：阪急航空㈱

調査面積：160m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年6月11日～14日

当調査地は、第2次調査地の東に位置し、条里溝復元ラインの交差する地点にある。調査の結果、近世条里造構溝・近世井戸、古代条里造構溝および平安時代の水田を検出した。

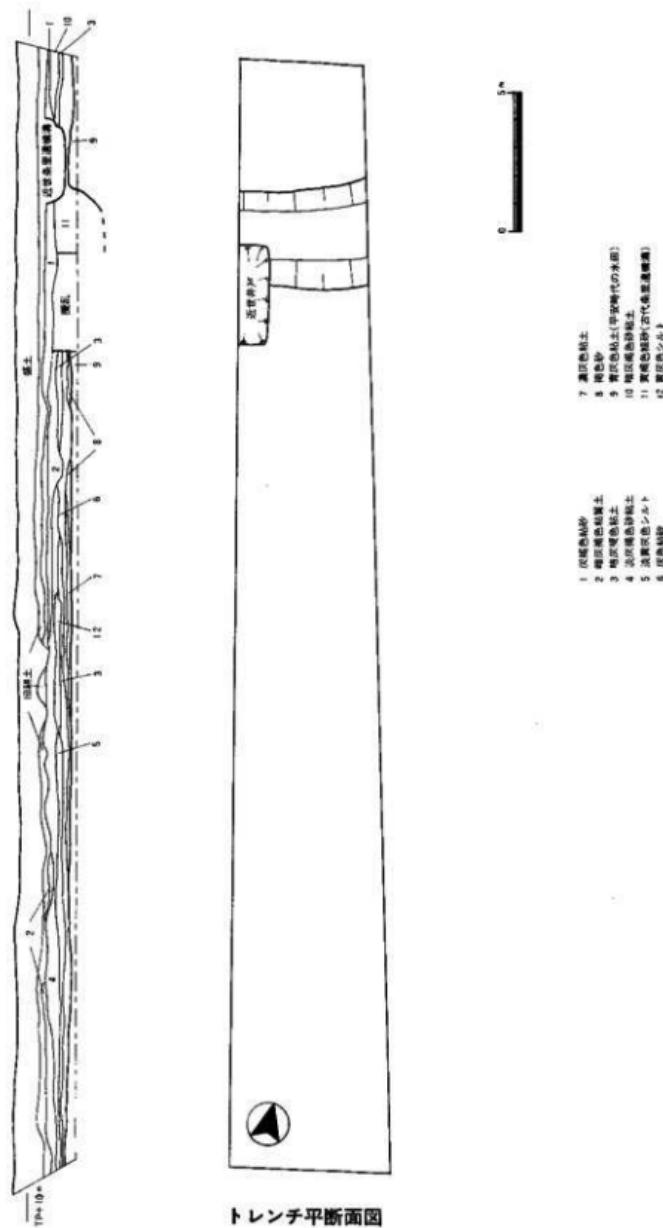
近世条里造構溝はTP+9.50m付近の旧地表を構築面としており、調査区北端部で検出した。東西に流路をもち、幅3.00m・深さ1.00mを測る。

古代条里造構溝は表土下1.80m(TP+8.70m)の青灰色粘土層上面を構築面としており、幅5.00m・深さ0.70mを測り、内部には黄褐色粗砂が堆積している。上層の近世条里造構溝は、わずかなズレを持って東西に走行している。この溝の構築面である青灰色粘土層上面は、平安時代の水田面で、南から北への傾斜をもっている。なお、当初予想された南北方向の溝は検出していないが、調査区北端において厚さ70cmの粗砂の堆積を確認しており、この粗砂の堆積が南北の溝に関わる可能性が考えられる。

古代条里造構溝内部および水田面を被う黄褐色粗砂層からは、平安時代を上限とする遺物が多数出土しているが、すべて流水によって磨耗を受けた細片である。



トレンチ全景



トレンチ断面図

#### 第4次調査 格納庫建設に伴う発掘調査

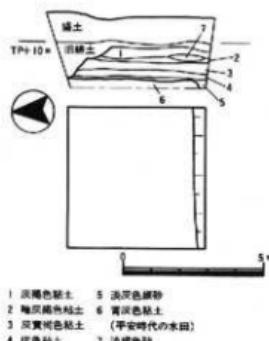
委託者：昭和航空㈱

調査面積：25m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年6月14日・15日

調査期間が限定されているため、遺構を明確に検出することはできなかつたが、旧地表下（TP + 9.80m）で東西方向の近世条里遺構溝を確認した。この溝は肩に木杭が打込まれており、内部には暗褐色礫土が堆積している。なお、この溝は旧大乗川の流路に一致している。

また、表土下2.40m（TP + 8.70m）付近では、平安時代の水田と推定される青灰色粘土層を検出した。この土層の上面は南側でわずかに落込んでおり、これが古代条里溝に続くものであると推定される。なお、水田上面には淡灰色細砂が堆積しており、水田が洪水によって埋没していることが明らかである。この淡灰色細砂層では、平安時代の羽蓑片を検出している。



トレンチ平面断面図



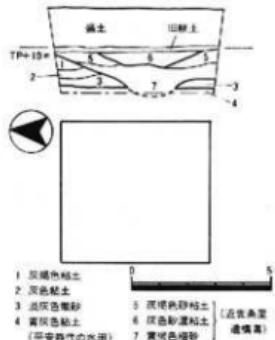
トレンチ全景

## 第5次調査 空中線用鉄塔建設に伴う発掘調査

委託者：第五管区海上保安本部

調査面積：36m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年6月18日・17日



調査によって確認した遺構は、東西の流路を持つ近世条里遺構溝と、平安時代の水田面である。

近世条里遺構溝は旧地表下（TP + 9.80m）を構築面としており、ほぼ調査区全域にわたって、灰色砂泥粘土（上層）と黄褐色粗砂（下層）の堆積が認められた。底部付近には杭が列状に打たれており、内部から伊万里焼系磁器の破片が出土している。

近世条里遺構溝の検出面より約1.00m下（TP + 9.00m）で淡灰色微砂層に達し、この層には土器器、須恵器の細片が含まれている。この層の下に、平安時代の水田耕作土である青灰色粘土が存在する。水田上面はTP + 8.70m前後を測り、ほぼ平坦である。

調査範囲が狹少なため、検出遺構の詳細は不明瞭であったが、第3次調査の結果同様、古代と近世の地割が完全には重複していないことが確認できた。



トレンチ全景

## 第6次調査 地下タンクおよび倉庫建設に伴う発掘調査

委託者：マイナミ空港サービス㈱

調査面積：180m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年7月9日～7月15日

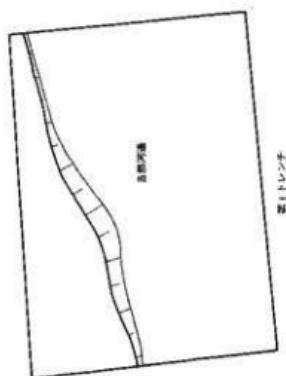
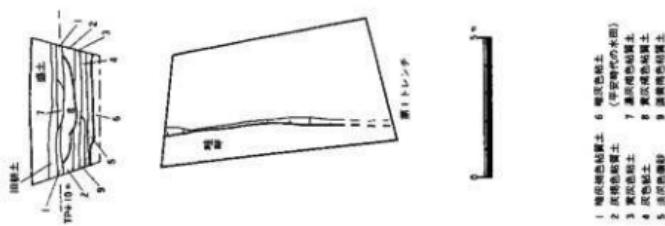
倉庫建設部分に第1トレンチ、地下タンク埋設部分に第2トレンチを設定した。調査の結果、第1トレンチで平安時代の水田、第2トレンチで同時代の自然河道を検出した。

第1トレンチでは、表土下2.00m (TP +9.00m) 以下に、河川流出土である淡灰色微砂が10~20cmの厚さで堆積している。この下の暗灰色粘土層が平安時代の水田耕作土である。この土層には、トレンチ東壁に沿って南北に伸びる10cm程度の高まりが認められることから、この高まりが畦畔ではないかと推定される。

第2トレンチ南側では、表土下2.00m (TP +9.00m) で青灰色微砂シルト層に達する。トレンチ北側では、この層を切込む自然河道を検出した。この河道は、第1次調査で検出した自然河道2の西の延長にあたる。内部には淡褐色粗砂が厚く堆積し、平安時代を下限とする土器片を多く含んでいる。流路はほぼ東西であるが、第1トレンチでは検出していないことから、第1トレンチの両側を流れているものと考えられる。



第2トレンチ全景



トレンチ断面図

第7次調査 事務所および格納庫等建設に伴う発掘調査

委託者：第一航空㈱

調査面積：260m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年9月5日～9月8日

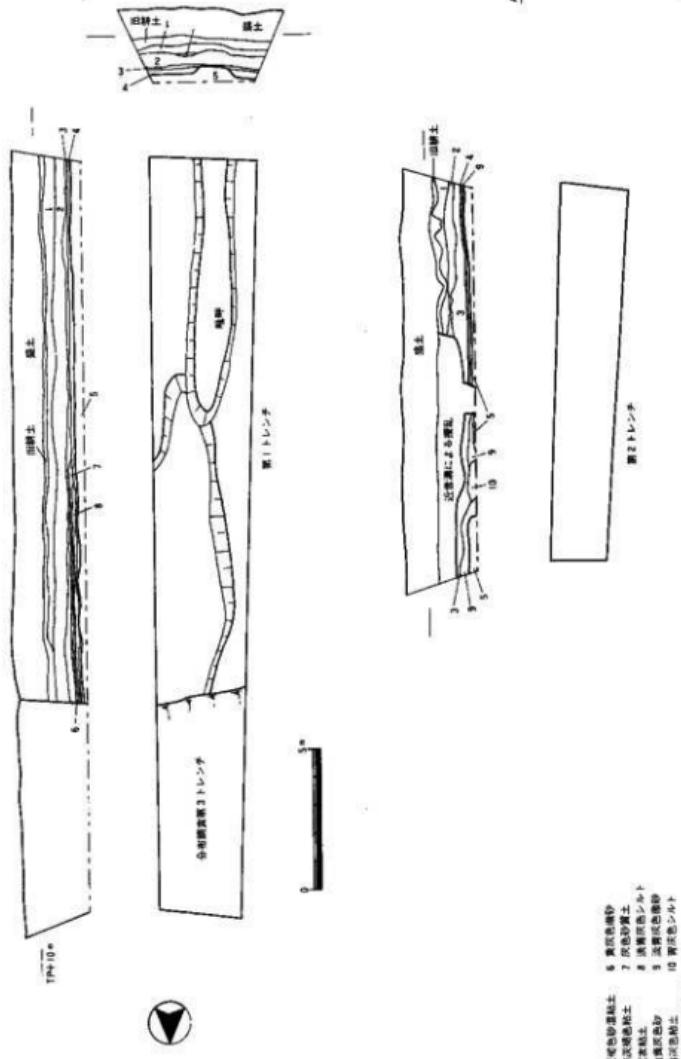
格納庫建設予定地に第1トレンチ、事務所建設予定地に第2トレンチを設定し、調査を実施した結果、第1トレンチで平安時代の水田、第2トレンチで近世条里構溝を検出した。

第1トレンチでは、表土下2.00m (TP +8.90m) 前後で河川流出上である淡黄灰色砂層に達する。その下の暗灰色粘土が平安時代の水田耕作土で、床面レベル高はTP +8.50～8.70mを測る。畦畔は南北に伸びるもので、トレンチ中央でとぎれており、そこより北側の水田面は東が低く西が高い。なお、第1トレンチ北側10mは分布調査の第3トレンチと重複している。

第2トレンチも第1トレンチとほぼ同様の土層堆積を示すが、平安時代の水田面は平坦で、畦畔等の施設は確認できなかった。一方、トレンチ北側では、TP +9.50m付近の旧耕土を構築面とする近世条里造構溝を確認した。この溝は幅8.00m・深さ1.30m以上を測り、東西に流路を持つが、途中で北へ分岐している。この地点は条里復元ラインが交差する個所であるが、古代条里造構溝は検出できず、古代と近世の区画に若干のずれがあることを確認した。



トレンチ全景



トレンチ平断面図

第8次調査 事務所等建設に伴う発掘調査

委託者：日本産業航空㈱

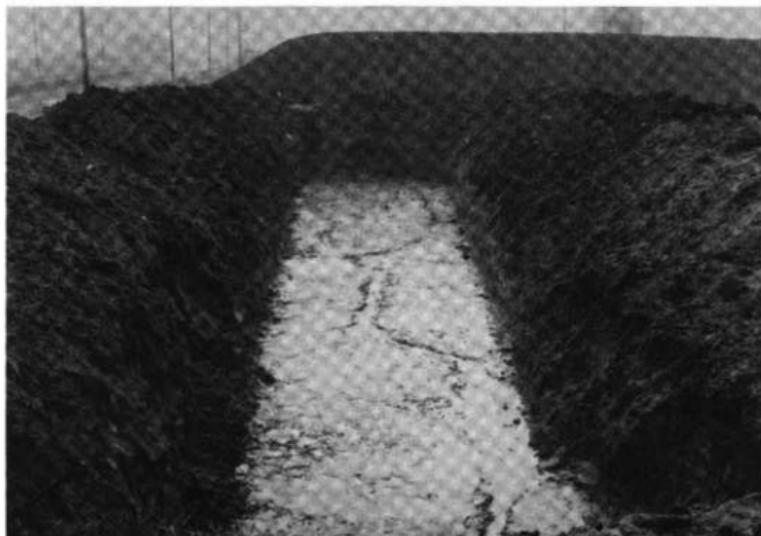
調査面積：200m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年9月26日～10月1日

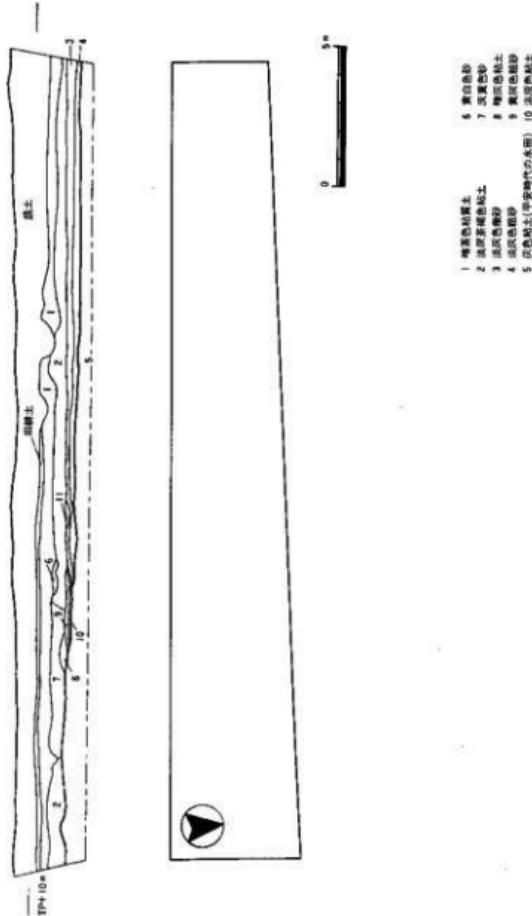
調査地は、東西方向の条里復元ラインに該当しており、調査の結果、近世条里造構溝・平安時代の水田を確認した。

近世条里造構溝は、表土下1.00～1.50m (TP +9.50～9.80m) の旧地表下を構築面としており、南岸のみを検出した。検出部の最大幅3.50m・最深1.10mを測る大規模なものである。内部堆積土は上層の暗茶色粘質土と下層の灰黄色砂からなり、下層から火鉢や伊万里焼系磁器などが出土している。また、溝の岸には流路に沿って、杭列が認められる。

近世条里造構溝の構築面より約1.00m下で、河川流出土である淡灰色粗砂～微砂層（平安時代の遺物包含層）を検出した。その下の灰色粘土が平安時代の水田耕作土である。水田床面のレベル高はTP +8.50m前後を測り、南側がわずかに低く上面に被る砂もやや厚く堆積しているが、古代条里造構溝を確認するには至っていない。



トレンチ全景



トレンチ断面図

## 第9次調査 格納庫等建設に伴う発掘調査

委託者：東亜国内航空㈱

調査面積：100m<sup>2</sup>

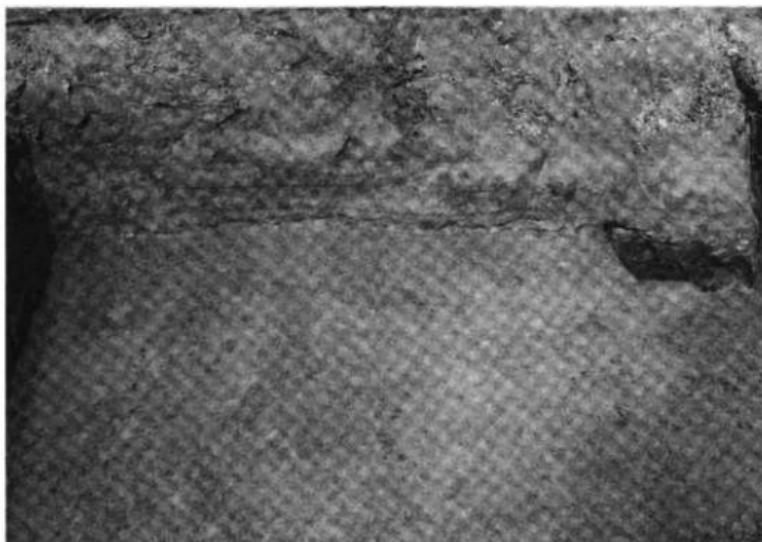
調査期間：昭和58年10月5日～10月7日

当調査地は、第3次調査地の南に隣接している。調査の結果、近世条里造構溝および平安時代の水田を検出した。

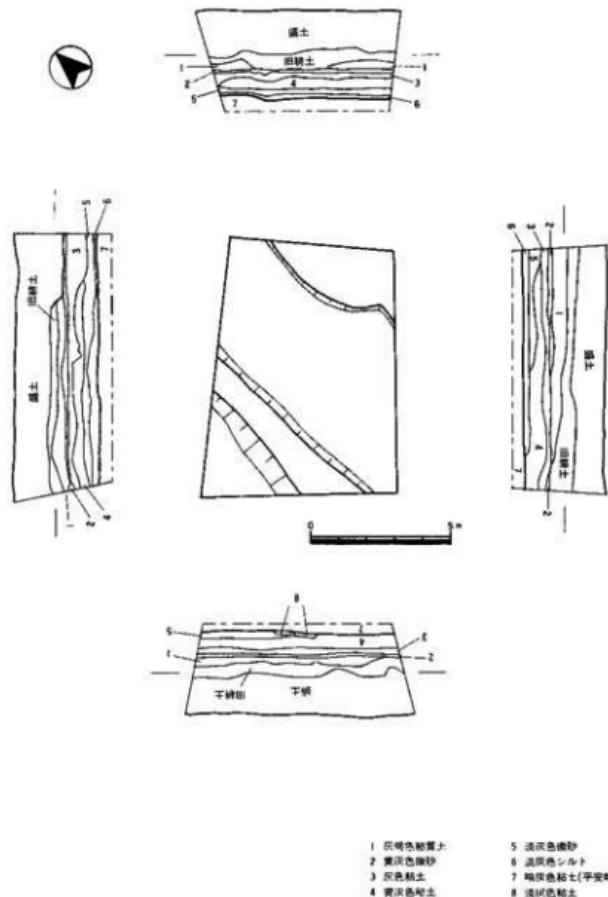
近世条里造構溝は表土下1.25m (TP +10.00m前後) の旧地表を構築面とするもので、幅2.50m以上・深さ0.40m程度で、南北の流路をもつ。

そこより50cm下に堆積する黄灰色微砂層には、瓦器や土師器の破片が含まれている。

さらに100cm下には、洪水を起因とする淡灰色の微砂あるいはシルトが10～20cmの厚さで堆積しており、その下の暗灰色粘土層が平安時代の水田耕作土である。水田床面のレベル高はTP +8.60m前後であるが、調査地中央部に南北方向の窪みが認められ、この部分には砂が厚く堆積していることから、一時的に流路としての機能を果たしていたことを示している。



トレンチ全景



トレンチ平面図

第10次調査 格納庫等建設に伴う発掘調査

委託者：朝日航洋㈱

調査面積：100m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年10月11日～10月13日

当調査地は、第2調査地の西隣にあたる。当地区では、西側の事務所建築予定地内に第1トレンチを、東側の格納庫建築予定地内に第2トレンチを設定した。調査の結果両トレンチで、第2次調査地で検出した近世条里遺構溝と古代条里遺構溝の西の延長を検出した。

近世条里遺構溝は、表土下1.20m (TP +9.90m) 付近の旧耕土下を構築面としており、流路に沿って杭が列状に打込まれている。

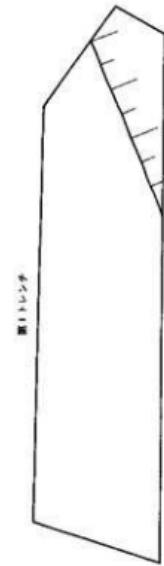
古代条里遺構溝は、表土下1.80m (TP +9.00m) 付近の灰色粘土層から切込んでいる。内部には淡灰色粗砂が堆積し、この層は溝内だけではなく、ベースである灰色粘土層の上面にも堆積している。



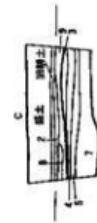
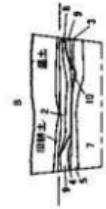
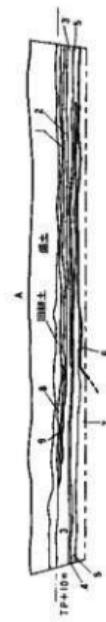
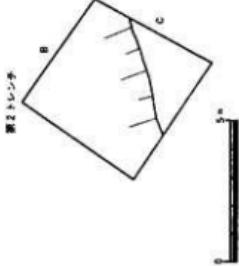
トレンチ全景



断面トレンチ



断面トレンチ



6. 汚褐色粘土 (中等程度のひび割れ)  
7. 汚褐色砂質粘土 (中等程度の砂質)  
3. 黄灰褐色粘土  
8. 淡灰褐色砂質粘土  
9. 淡灰褐色砂質粘土 (比較的堅密な層)  
5. 淡灰褐色砂質  
1. 汚褐色砂質粘土  
2. 淡灰褐色砂質粘土  
4. 塗灰褐色粘土  
10. 淡灰褐色砂質

トレンチ平断面図

第11次調査 八尾空港総合ビル浄化槽建設に伴う発掘調査

委託者：関西国際空港ビルディング㈱

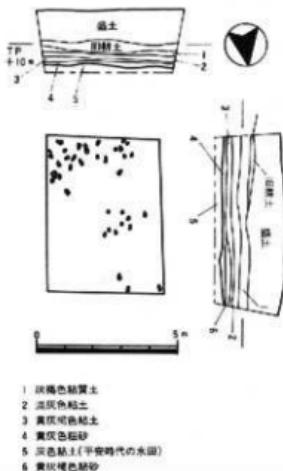
調査面積：30m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年10月18日・10月19日

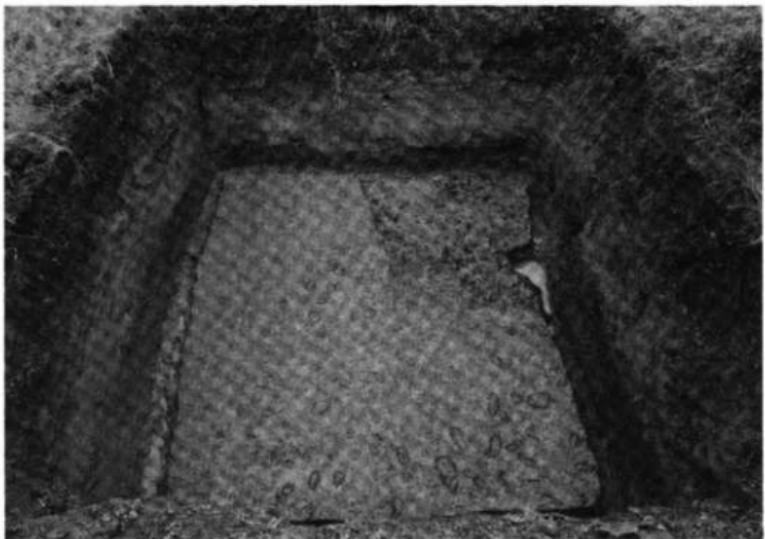
当調査区では、小面積の調査であるにもかかわらず、平安時代の水田を検出することができた。

表上下1.80m（TP +9.40m）付近で、他の調査地同様、河川出土である黄灰色粗砂を確認した。この土層は厚さ5～15cmを測る。

その下に堆積する灰色粘土層が、平安時代の水田耕作上で、水田耕土の特徴を示す酸化鉄・マンガン斑の集積が認められる。水田床面のレベル高はTP +9.20m前後を測り、上面には40個前後の足跡状遺構が遺存していた。



トレンチ断面図



トレンチ全景

## 第12次調査 共同住宅建築に伴う発掘調査

委託者：異住宅㈱

調査地：南木の本3丁目13、19-3

調査面積：176 m<sup>2</sup>

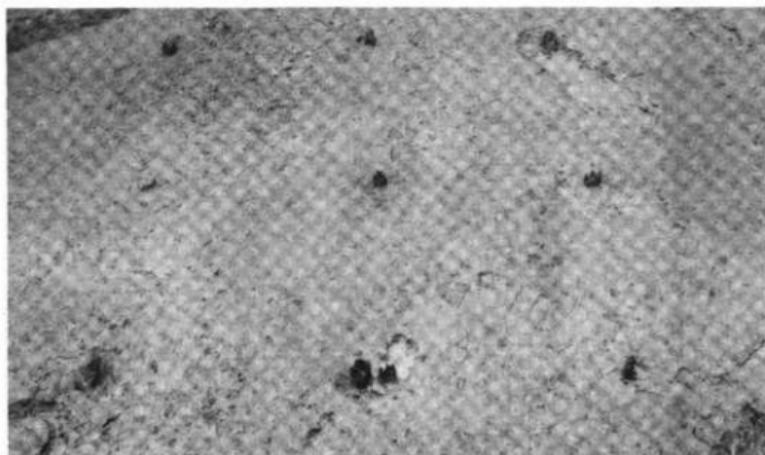
調査期間：昭和58年6月10日～6月18日

当調査地は、昭和56年3月に八尾市教育委員会が実施した調査地の北方約100mに位置することから、昭和58年1月に八尾市教育委員会によって試掘調査が実施された。その結果、表土下約3.00m（TP +7.80m）で古墳時代前期～中期の遺物包含層を確認したことから、浄化槽部分について発掘調査を実施するに至った。

調査の結果、表土下2.80m（TP +7.80m）で古墳時代前期～中期の遺物包含層である黒灰色粘土層を確認した。この土層は厚さ約60cmを測り、下部で掘立柱建物を構成する柱根を検出した。柱穴の構築面は、その下の暗灰青色粘土層上面である。この建物は2間4方（3.50m×4方）の規模をもつ総柱の建物で、北東と南西の相対する2辺の中央部には、2本ずつの柱があり、合計11本の柱が良好に遺存していた。なお、柱の先端付近には溝が彫廻らされている。



調査地周辺図



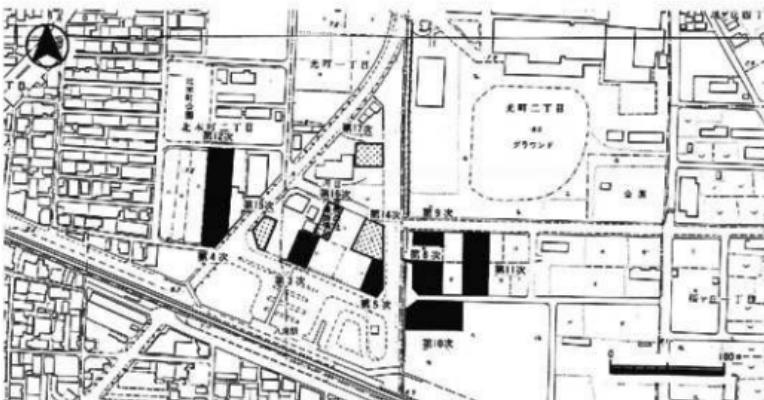
掘立柱建物柱根検出状況

## 2 東郷遺跡

東郷遺跡は、近鉄八尾駅前の北本町・東本町・光町・桜ヶ丘一帯に広がる弥生時代から鎌倉時代に至る複合遺跡である。当遺跡は長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地している。同一の沖積地上には、南東から東弓削遺跡・中田遺跡・小阪合遺跡が連なり、当遺跡の南に接して成法寺遺跡、さらに北方に萱振遺跡・山賀遺跡などが位置している。

当遺跡発見の契機は、昭和46年度に東本町2丁目で行われた水道管敷設工事によって、墨書き土器が出土したことによる。その後、昭和56年1月に八尾市教育委員会が桜ヶ丘3丁目ににおいて第1次調査を実施して以来、昭和57年度までに八尾市教育委員会および(財)八尾市文化財調査研究会によって、計13回（総調査面積 3310m<sup>2</sup>）にわたる発掘調査を断続的に実施してきた。その結果、当遺跡では、とくに古墳時代前期の遺構・遺物が良好な形で遺存していることが判明した。この時期のおもな遺構としては、竪穴式住居・掘立柱建物・井戸・土坑・土器集積などが挙げられる。また、出土遺物には在地産土器の他、山陰・北陸・吉備・紀伊など他地方の特徴をもつものも多く認められ、当遺跡が古くから他地域との交流が盛んであったことを示唆している。

なお、昭和58年度に実施した発掘調査件数は、第14次調査～第17次調査の4件で、総調査面積は1460m<sup>2</sup>である。



調査地周辺図

#### 第14次調査

調査地：光町1丁目72

委託者：田中一任

調査面積：480m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年3月18日～4月21日

当調査地は、昭和57年度の第5次調査地の北隣に位置する。調査の結果、表土下1.20m (T P +6.70m) で平安時代～江戸時代の遺物包含層である灰茶褐色粘土層を検出した。それより約20cm下で、平安時代～鎌倉時代の遺構面である暗茶灰色粘土層上面に達する。この層は、古墳時代前期の遺物包含層でもあり、層厚は約20cmを測る。その下に堆積する黄灰褐色シルト層上面が古墳時代前期の遺構面である。

古墳時代前期の遺構は、竪穴式住居2基・井戸2基・上坑2基などである。2基の竪穴式住居はともに隅丸方式を呈し、規模は5.40×5.40mと4.20×4.20mを測る、これら住居内の堆積土からは、庄内甕をはじめとして、同時期の壺・甕の破片が出土している。2基の井戸は径約1.0m・深さ約0.8mを測り、断面U字型を呈する。土坑はそのほとんどが不定形を呈し、浅いものである。これらの遺構は、すべて後世の掘削などによって、上部が削平されている。なお、これらの他に、調査区南西隅では沼沢地状の落込みが認められ、縁辺部には土器が集積している。この沼沢地状の落込みは、これまでの調査でも確認している。

平安時代～鎌倉時代の遺構には、井戸1基・上坑4基・住穴1個などがある。これらの遺構のうち、1基の井戸を除いて内部がブロック状の上層で充填されているため、人為的に埋められたものと考えられる。なお、内部堆積土内からは、瓦器檻・瓦器小皿・土師質台付皿等が出土している。

その他に、前記の遺構と切合う数10条の小溝を検出しているが、これらは幅・深さ・方向等が不揃いである。



トレンチ全景



土器集積

## 第15次調査 太陽生命八尾ビル新築工事に伴う発掘調査

調査地：北本町2丁目136-2

委託者：太陽生命保険相互会社

調査面積：300 m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年5月13日～5月25日

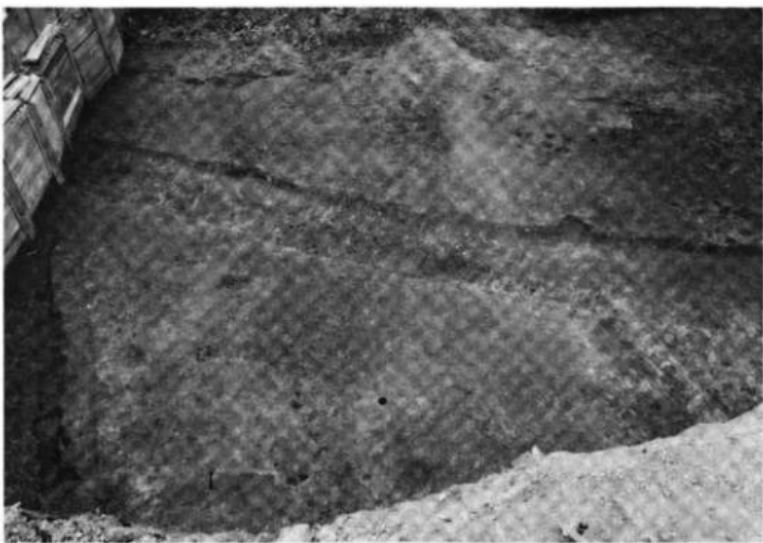
当調査地は、昭和56年度の第3次調査地の西、昭和57年度の第12次調査地の南東に位置する。これらの調査地では、平安時代～鎌倉時代の水田および古墳時代前期の遺構などを検出している。

今回の調査では、表上下1.40～1.50m（TP+6.50m前後）で、平安時代～鎌倉時代の水田面を検出した。それより20～30cm下には、弥生時代中期～古墳時代前期の遺物を含む灰褐色粘土上が、10cm程度堆積している。その下の淡灰褐色シルト粘土上面が、弥生時代中期の遺構面である。以下の層については、6×1mのトレンチを設定してさらに掘削を続けたが、遺構・遺物は確認できなかった。

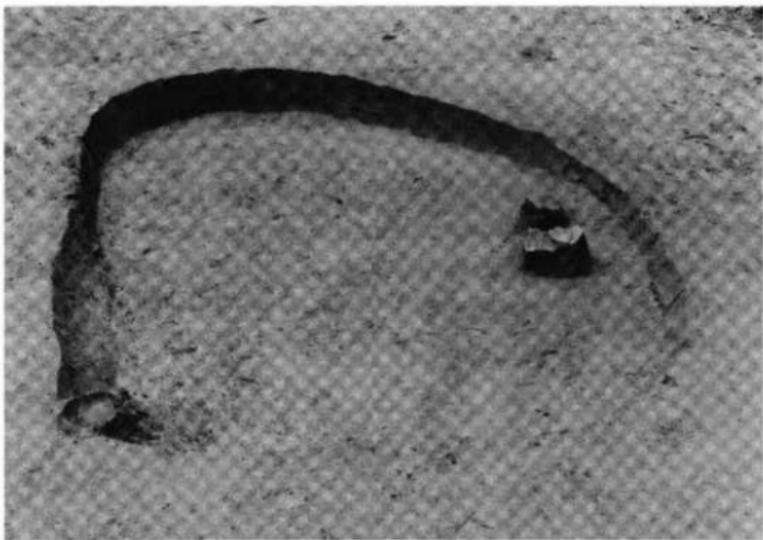
弥生時代中期の遺構は2基の土坑で、調査地の北部で検出された。ともに梢円形で、径2.0m前後と3m前後、深さは0.2mを測る。内部堆積土からは、壺・甕の破片がわずかに出土している。

なお、この上に堆積する灰褐色粘土は、他の調査結果が示すように、古墳時代前期の沼沢地と考えられる。

平安時代～鎌倉時代の水田は、暗灰褐色粘土層を耕作土としている。畦畔は、東西方向のもの2本と、これらに直交する南北方向のもの1本を検出した。畦畔は、いずれも幅50cm・高さ15cmを測る。水田の南北幅は、約9.00mを測り、水田面には耕作の痕跡である南北方向の小溝4条を検出している。一方、南側の畦畔のさらに南には、幅100cm・深さ30cmの溝が、畦畔に平行して伸びている。水田上面および溝内からは、瓦器椀・土師質小皿・須恵質土器などの破片がわずかに出土している。その他、調査区の北部では、南東から北西の流路をもつ幅150cm前後の溝を検出した。



平安時代～鎌倉時代の水田面



弥生時代中期の土坑

第16次調査 仮称「プレイスポット」新築工事に伴う発掘調査

委託者：㈱木村商事

調査地：光町1丁目69-2 北本町2丁目145-12他

調査面積：200m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年8月1日～8月13日

当調査地は、昭和56年度の第3次調査地の北にあたり、第14次調査地の西に位置する。調査の結果、調査区南部の表上下1.20m (TP +6.60m) 前後で平安時代～鎌倉時代の水田面を確認した。調査区北部では、それより約20cm下に堆積する淡灰褐色細砂土層上面で、古墳時代前期の遺構面を検出した。

古墳時代前期の遺構は、井戸1基・土坑7基・溝3条などで、おもに調査区北部で検出した。井戸は東半分を検出したのみであるが、検出部で径約160cm・深さ60cmを測る。底部近くからは、口縁部が欠損した壺1点と、内部堆積土から壺・甕の細片が出上している。また、井戸の南に位置する土坑は径160cm前後・深さ30cmを測り、内部からは壺の他に庄内甕・布留式甕などが集積していた。

平安時代～鎌倉時代の水田は、暗茶灰色粘土層を耕作土としている。この層は南へゆるやかに傾斜を持ち、粘性が高く、古墳時代前期の遺物が散乱した状態で多量に出土している。これまでの調査結果を考えあわせると、この部分は古墳時代前期には沼沢地であったが、後に整地され、水田として利用されていたと考えられる。



トレンチ全景



古墳時代前期の土坑

第17次調査 貸事務所建設に伴う発掘調査

委託者：第一生命保険相互会社

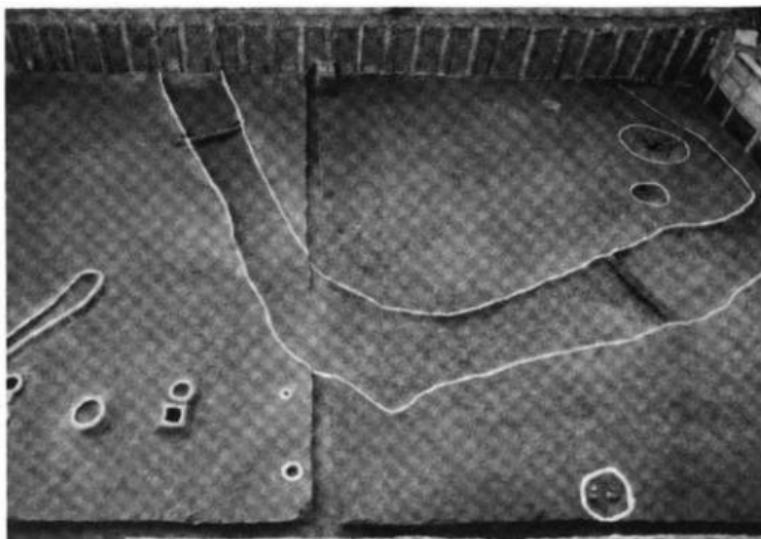
調査地：光町1丁目47-1他

調査面積：480 m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年11月24日～12月15日

当調査地は、第14次調査地・第16次調査地の北にあたり、これまでの調査地では最北に位置するため、当遺跡の北部の状況を確認するために、重要な地点である。調査の結果、調査地東部で柱穴群、西部で方形周溝墓を検出した。これらの造構は上部が削平されているため、構築レベルは明らかではないが、同時期のものとは考え難い。

方形周溝墓は、約3分の2を検出した。一辺8.50m 4方程度と考えられ、現周溝は幅130～180cm・深さ15～20cmを測る。周溝内の遺物は細片ばかりである。他に庄内甕や布留式の壺・小型丸底壺などが集積した状態で出土した箇所があり、これらは方形周溝墓の築造時期を推定できるものである。柱穴は建物を構成するものと考えられ、計35個を検出した。そのうちの3個では、根石を確認している。



トレンチ全景

### 3 八尾南遺跡

倉庫新築に伴う発掘調査

委託者：コクヨ㈱

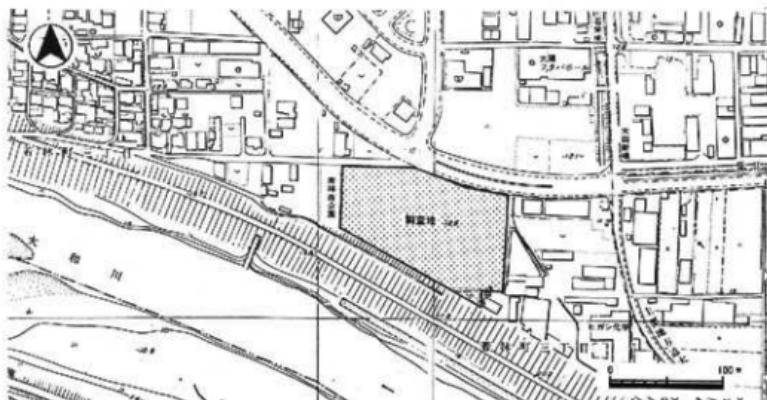
調査地：若林町3丁目27

調査面積：2600m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年2月28日～6月6日

八尾南遺跡は八尾市の南西部に位置し、南から伸びる羽曳野丘陵と河内低平地との接点にあたる。当遺跡は、昭和53～55年に実施された地下鉄2号線延伸工事に伴う発掘調査によって、旧石器時代から鎌倉時代に至る複合遺跡として認識されている。当遺跡周辺には、東方に木の本遺跡・太田遺跡・大正橋遺跡があり、北方には太子堂遺跡・亀井遺跡が立地している。また、西側は市界を挟んで長原遺跡と接しており、南方には津堂遺跡・小山遺跡（藤井寺市）があり、さらに古市古墳群が広がっている。

当調査地では、昭和57年12月に八尾市教育委員会が実施した試掘調査によって、弥生時代～古墳時代の遺物包含層が認められた。そこで当初、建物基礎部分に3×100mのトレンチを4箇所設定して調査を開始したが、方墳・方形周溝墓の一部が検出されたため、調査範囲を対

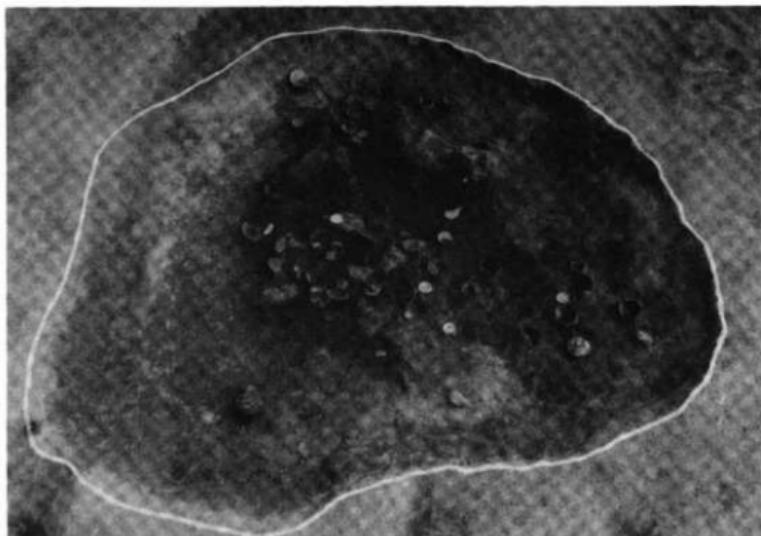


調査地周辺図

象地全域に拡張して調査を継続するに至った。その結果、表土下0.6～0.8m(TP+10.60m前後)で弥生時代の方形周溝墓・古墳時代の方墳および平安時代～鎌倉時代の河道などを検出した。なお、これらの遺構は後世の擾乱によって上面が削平されており、各時代ごとの構築面は明確ではない。

弥生時代～古墳時代の主な遺構は方形周溝墓・方墳である。これらは上面が削平されていることから、主体部は確認できておらず、周溝も痕跡として残っているだけの部分もある。方形周溝墓は10基検出され、規模は6.5×6.5m～10×10m、現周溝の深さ10～50cmを測る。周溝内からは、鏡内第V式の土器が出土している。なお、陸橋部をもつものも2基検出している。方墳は5基検出され、規模は5×5m～10×10m、現周溝の深さは10～30cmを測り、周溝内からは、5世紀末～6世紀初頭の須恵器(陶邑編年I型式5段階～II型式1段階)が出土している。

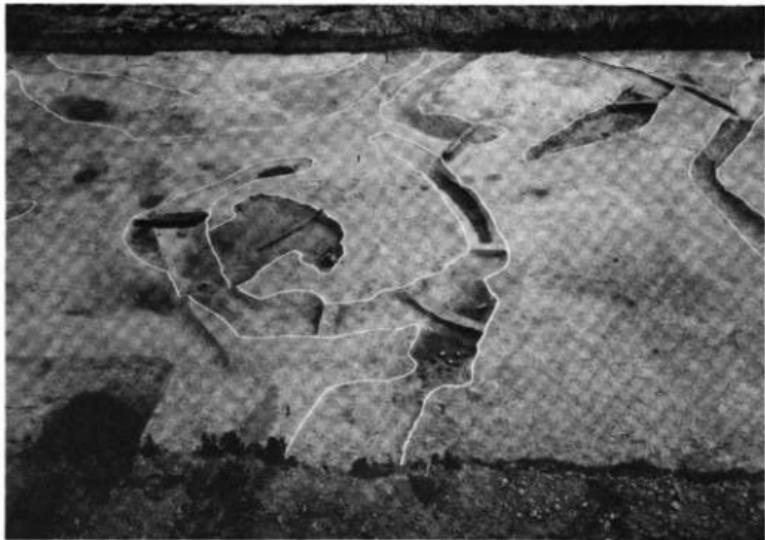
平安時代～鎌倉時代の遺構には、柱穴群・井戸・焼土坑の他、自然河道がある。これらのうち、とくに焼土坑からは、多量の瓦器楕・瓦器小皿・土師質の皿などが出土している。自然河道は調査区西部を南から北へ流れるもので、条里坪界復元ラインに該当することから、条里に規制されて流路を選定されている可能性がある。



中世の焼土坑



トレンチ全景



方形周溝墓

## 4 太子堂遺跡

### 集合住宅建設に伴う発掘調査

委託者：東興殖産㈱・スミト一建設㈱

調査地：東太子2丁目1他

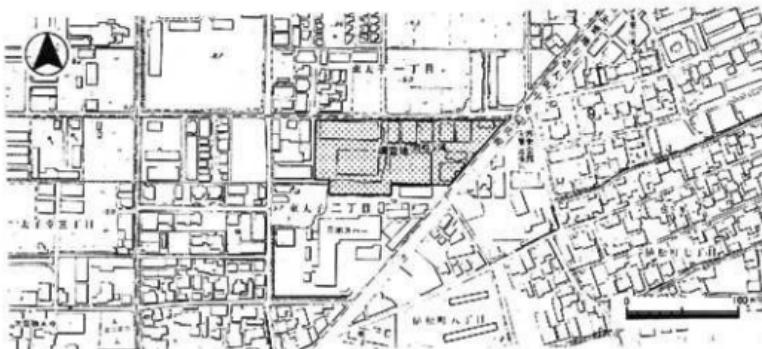
調査面積：3393m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年6月6日～10月27日

八尾市の西部に位置する太子堂遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川の左岸一帯に広がる自然堤防上に立地している。近隣には同様の立地条件で、跡部遺跡・植松遺跡がある。当遺跡推定範囲内には、物部守屋墳・鏡矢塚・弓代塚・大聖勝軍寺など聖徳太子に関する史跡が伝えられている。

八尾市教育委員会が実施した昭和58年3月の試掘調査の結果、表土下2.00m (TP + 8.00m) 前後で奈良時代の遺物包含層、それより40～50cm下方で古墳時代の遺物包含層を確認した。そこで調査対象地内の開発・建築箇所のすべてを発掘調査することとなりたが、掘削深度が遺物包含層に達しない埋設工事区については、立会調査を行った。

調査の結果、TP + 8.10m 前後の茶褐色粘砂層を構築面とする中世の溝、それより20～40cm 下に堆積する青灰色細砂層上面を構築面とする奈良時代の井戸・柱穴・落込みを検出した。なお、中世の生活面を構成する茶褐色粘砂層は奈良時代の遺物包含層であり、奈良時代のベース



調査地周辺図

となる青灰色細砂層は古墳時代の遺物包含層である。

奈良時代の井戸は3基（SE-1～SE-3）あり、茶褐色粘土層の下部で井戸枠の上部が検出された。井戸枠はSE-1・SE-2が縦板組、SE-3が横板井籠組である。

SE-1は調査区西部で検出したもので、東西80cm・南北60cmの規模を測り、井戸枠検出面から210cmで底部に達する。井戸枠は上下2段からなり、それぞれ3枚ずつが用いられている。下段の1枚には数箇所に柄穴や切込みがあるが、井戸枠本来の機能には直接関係しないようで、他からの転用が考えられる。井戸枠内部には灰色細砂混粘土が堆積し、底部には小石が敷きつめられている。出土遺物の中には、土師器高杯の桙部内面に「高杯」と記されたものと、須恵器杯の底部に「西」と記されたものが認められる。

SE-2は調査区中央部で検出した。SE-1と同規模の井戸枠をもち、検出面から170cmで底部に達する。井戸枠は3枚からなり、下層部分に枠を支える横木が取付けてある。底部にはSE-1同様小石が敷きつめられている。内部からは、土師器皿・須恵器壺・平瓶などが出土している。

SE-3は調査区東部で検出した。井戸枠は前記の2基とは異なり、1辺90cmの方形である。井戸枠は4枚の横板を2段に組み、東西の井戸枠の両端に切込みがはいっている。下段の井戸枠には、それぞれ「東」・「西」・「南」・「北」の墨書きがある。出土遺物は土師器壺などで量は比較的少ない。

柱穴・落込みはSE-3の周辺で検出され、青灰色細砂層を構築面としている。

柱穴は径10～60cm・深さ10cm前後のものが30個余りあり、一部にはSE-3の上層に相当するものも含まれる。また、調査区壁面では、先端に切込みのある柱根を検出している。これら柱穴・柱根から、2棟以上の建物を想定できるが、全容は不明である。

落込みは東西10m・南北5mを測り、内部から6世紀代の須恵器が多量に出土している。これらは明瞭な造構に伴わないので良好な資料とは言い難いが、SE-3や柱穴群との関連を知るうえで重要であろう。

中世の溝は幅20～50cm・深さ10～30cmを測る。内部には茶褐色または茶灰色のやや粘性の高い埋土が堆積し、土師質・須恵質の土器の細片が出土している。これらは調査区のはば全域にわたって検出され、東西方向のもの20条前後、南北方向のもの40条前後を数える。これらは、内部堆積土や出土遺物の状況には大差なく、ほぼ同時期のものと考えられる。

その他、奈良時代の包含層から土馬・墨書き土器等が出土している。また、青灰色細砂層内では、馬と思われる動物遺体を検出した。頭部を南に、脚部を東に向けて横たわっており、明瞭な掘形は認められなかった。齒の部分は比較的良好に遺存していたが、他の部分はわずかに痕跡が認められる程度である。



中世の溝



奈良時代の井戸

## 5 小阪合遺跡

小阪合遺跡は、八尾市中央部の南小阪町・青山町・若草町に所在する弥生時代以降の遺跡である。当遺跡は、長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同様の条件で南に中田遺跡、西に成法寺遺跡、北東に東郷遺跡が近接している。当遺跡発見の契機は、昭和27年の若草町で行われた府営小阪合住宅建設に際し、古墳時代の遺物が出土したことによる。また、昭和49年に八尾市教育委員会が実施した中田遺跡範囲確認調査では、青山町3丁目で古墳時代の遺物包含層が確認されている。

この地域一帯では、八尾市による土地区画整理事業の一環として、区画街路網を設置する計画がなされ、これに先立って八尾市教育委員会が昭和56年10月に実施した試掘調査の結果、古墳時代～近世の遺物包含層が確認された。このために、上記の事業によって地下の埋蔵文化財が破壊される部分について、昭和57年度から発掘調査を実施するに至った。

昭和57年度に実施した第1次調査の結果、弥生時代から近世に至る多くの遺構・遺物を検出した。今年度は、第2次調査・第3次調査の2回にわたって発掘調査を実施した。



調査地周辺図

## 第2次調査

委託者：八尾市

調査地：青山町1丁目・3丁目の一部

調査面積：390 m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年6月21日～7月14日

第2次調査は、楠根川切替え工事区で実施したものである。この調査では、掘削深度が浅かったため、近世の遺構を検出したのみであった。表上下0.5m(TP+7.50m)前後で中世の遺物包含層である灰褐色微砂粘土層上面に達する。この面が近世の遺構面で、東西に流路を持つ溝を5条検出した。また、その他に近世に埋没した河川の痕跡も検出した。

## 第3次調査

委託者：八尾市

調査地：青山町4丁目・5丁目の一部

調査面積：1544 m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年10月27日～昭和59年2月29日

調査の結果、弥生時代後期末・古墳時代前期・古墳時代中期～奈良時代・中近世の4時期の遺構面を検出した。それぞれの遺構面は、前時代の包含層上面である。

弥生時代後期末の遺構は、表上下1.10m(TP+7.40m)付近の黄灰色粗砂混粘土上面を構築面としている。検出された遺構は土坑・溝・落込み等である。

古墳時代前期の遺構は、その上に堆積する黄灰色粘土上面(TP+7.75m)を構築面としており、方形周溝墓・土坑・溝・落込みなどが、調査区のはば全域で検出された。なお、調査区の西部では幅100m以上にわたる砂の堆積が認められた。

古墳時代中期～奈良時代の遺構は、その上に堆積する暗茶灰色シルト粘土上面(TP+7.95m)で検出された。おもな遺構は奈良時代の井戸・柱穴で、調査区南東部で検出された。井戸は木枠を持つ方形の井戸で、1辺80cmを測り、内部から土師器皿・鉢等が出土している。柱穴は隅丸方形を呈し1辺60～80cmを測り、内部に柱根の残存するものもある。

中近世の遺構は、その上に堆積する暗茶灰色粘土上面(TP+8.30m)で検出された。中世の遺構は、調査区南東隅で検出した1基の井戸である。この井戸は曲物を井筒としており、内部から瓦器椀・土師質小皿等が出土している。近世の遺構には、調査区全域で検出した数10条の溝がある。



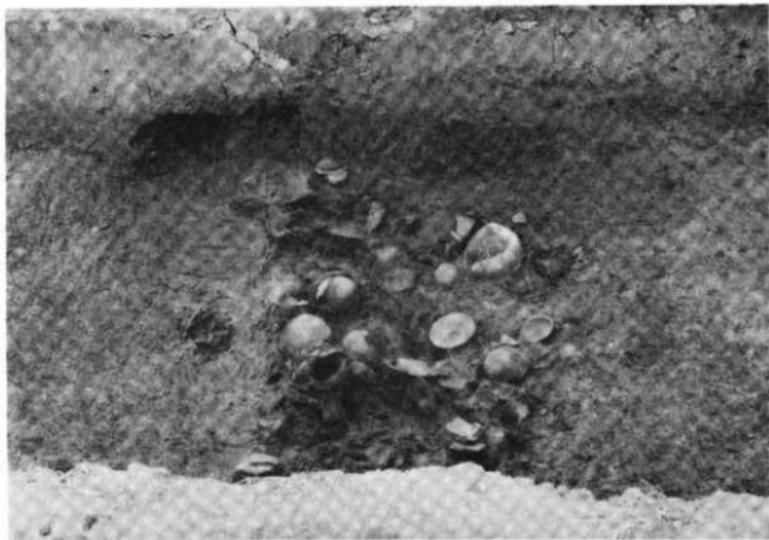
第2次調査トレンチ全景



第3次調査トレンチ全景



第3次調査奈良時代の井戸



第3次調査古墳時代前期の溝

## 6 成法寺遺跡

八尾市立成法中学校校舎増改築に伴う発掘調査

委託者：八尾市

調査地：清水町2丁目2-5他

調査面積：320 m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年7月8日～7月30日

成法寺遺跡は八尾市の中央部に位置し、東郷遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡などとともに、長瀬川・玉串川間の沖積地上に立地する弥生時代以降の遺跡である。当遺跡発見の契機は、昭和56年5月に八尾市教育委員会が実施した光南町1丁目の試掘調査による。その後同地点での発掘調査によって、古墳時代前期の方形周溝墓と古墳時代後期の掘立柱建物が検出され、2時期にわたる異なった土地利用が明らかとなった。

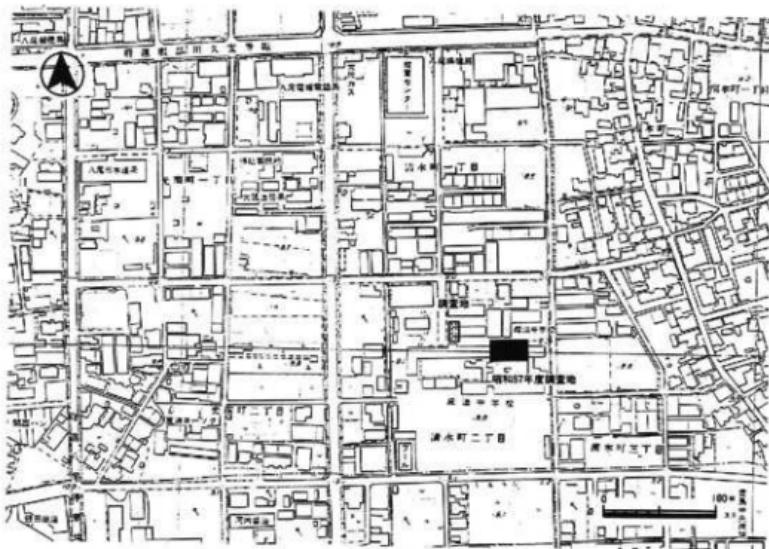
今回の調査地である成法中学校はこの地点から南東約200mの地点に位置し、昭和57年7月の発掘調査によって、表土下1.40m (TP +7.80m) 付近で鎌倉時代の遺構面、それより30cm下で奈良時代の遺構面を確認している。

今回の調査では、鎌倉時代・奈良時代の他、古墳時代前期の3時期にわたる遺構面を確認した。なお、これらの遺構は、南側の調査区で検出した。

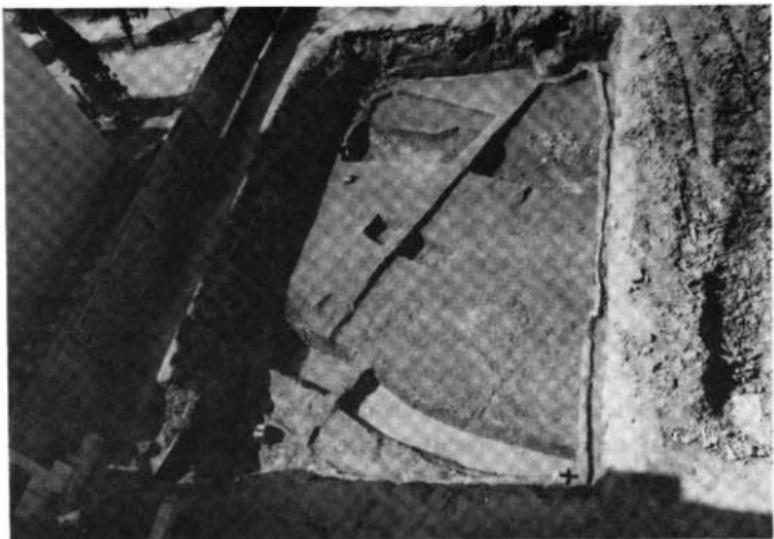
古墳時代前期の遺構面は、表土下1.90m (TP +7.30m) 付近に堆積する青灰色粘土上面で、土坑・溝などが検出された。土坑内からは、壺・甕などの破片が出土した。溝のうち2条は東西の流路をもち、幅120～180cm・深さ60cm前後を測り、溝の斜面や底部近くで庄内甕や小型丸底壺を含む多量の遺物が認められた。

それより30cm上に堆積する灰茶色細砂層上面で、奈良時代の遺物を含む落込み状遺構を検出した。

さらに30cm上に堆積する灰褐色細砂泥粘土層上面が、鎌倉時代の遺構面である。この層は、同時に奈良時代から平安時代の遺物包含層でもある。検出遺構は柱穴・溝などである。柱穴は調査区南西隅に位置し、合計5個を検出した。径24～96cm・深さ10～28cmを測り、2間×1間(南北3.75m×東西1.50m)の建物が想定できる。溝は柱穴群の東に位置し、幅70cm・深さ15cmを測り、東西の流路をもつ。



調査地周辺図



古墳時代前期の造構面

## 7 楽音寺遺跡

### 汚水処理槽調査に伴う発掘調査

委託者：医療法人貴島会

調査地：大字楽音寺 263-1 他

調査面積：234 m<sup>2</sup>

調査期間：昭和58年 8月23日～10月3日

楽音寺遺跡は、八尾市北東部の生駒西麓に形成された扇状地の末端に位置する。当地域では、清原得巣氏が小字エビジにおいて凹石を採集されたことから遺跡として認識されていたが、その実態について詳細な報告はない。当該地では、昭和58年5月に八尾市教育委員会が試掘調査を行った結果、表土下 0.6m (TP + 16.00m) 付近で縄文時代から鎌倉時代に至る遺物包含層を確認したため、掘削深度の深い汚水処理槽の部分について、発掘調査を実施するに至った。

調査の結果、縄文時代後期と平安時代の遺構の他、古墳時代～鎌倉時代の遺物包含層を確認した。

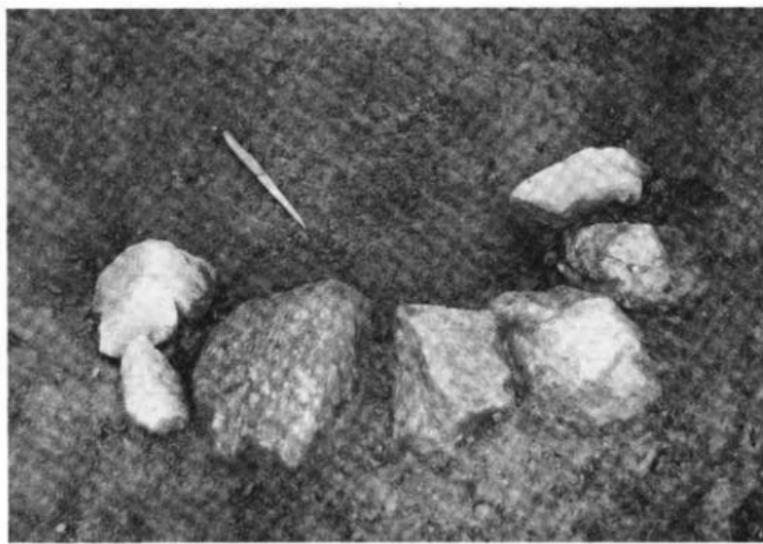
表土下 0.6 ~ 0.7m (TP + 16.00m) 付近で淡灰茶褐色礫砂土層に達する。この層が古墳時代から鎌倉時代に至る遺物包含層で、土師器・須恵器・瓦器等の破片を含んでおり、層厚約15cmを測る。その下に堆積する淡黄茶色微砂土層上面が平安時代の遺構面である。検出した遺構は井戸1基・柱穴2個である。井戸は調査区南部で検出したが、上部破損のため、底部付近の石組みを確認したにすぎない。径は約60cmを測り、最底部はTP + 13.00mを指し、遺構面からの深さは、1.90m程度と推定される。底部付近で黒色土器碗(11・12)・刀子(13)を検出した。柱穴は井戸の北7~10mの地点で検出したもので、3m間隔で南北に並んでいる。径40~80cm・深さ20~30cmを測り、北側の柱穴の底部には根石が据えられていた。

それより約20cm下に堆積する黒褐色粘土が縄文時代後期の遺物包含層で、層厚約20cmを測る。ここからは、縄文式土器の細片(1~3)が出土している。この層の下に堆積する青灰色砂混粘土上面(TP + 14.00m前後)が同時代の遺構面である。この面では、落込み状遺構を検出した。この遺構は、東部が調査区外へ至るために全容は不明であるが、検出部の最大幅300cm・最小幅100cm・深さ60cmを測り、内部には上層の包含層である黒褐色粘土が堆積している。

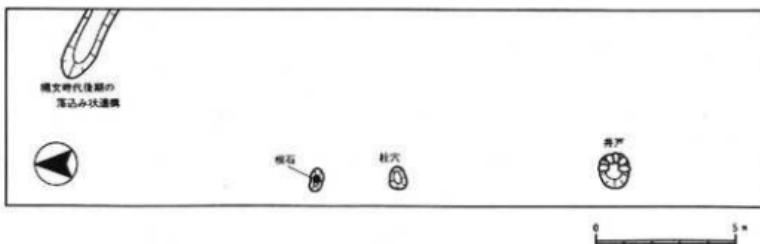
さらに下層(TP + 12.90m付近)に堆積する黒褐色砂混粘土からも、縄文式土器の細片が1点出土している。



調査地周辺図



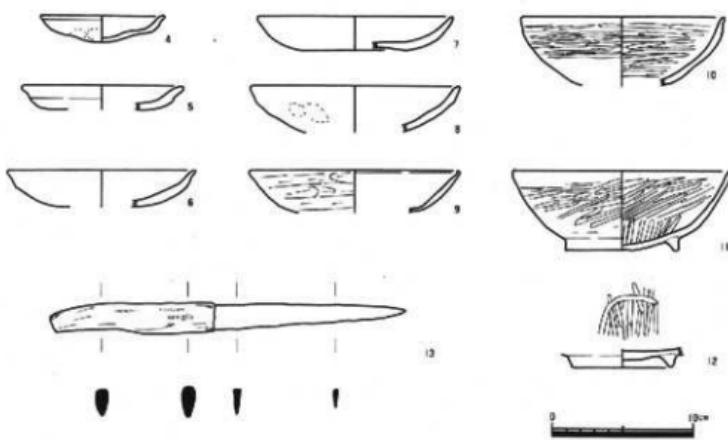
井戸底・刃子検出状況



トレンチ平面図



包含層出土縄文式土器



包含層出土遺物(4~10) 井戸出土遺物(11~13)

## 8 中田遺跡（八尾木地区）

曇川地区学習等供用施設建設に伴う発掘調査

委託者：八尾市

調査地：八尾木4丁目

調査面積：220 m<sup>2</sup>

調査期間：昭和59年2月2日～2月19日

調査地の八尾木4丁目は、古大和川デルタ上に出現した弥生時代から古墳時代集落跡の一つである中田遺跡南縁の一画にあたる地点である。昭和49年から51年にかけて、調査地の周辺部では各種の土木工事があって、古墳時代前期の遺構・遺物が認められている。これらのうちとくに注目されるのは、同遺跡刑部地区で吉備系土器の夥しい出土もあって、この地帯が古墳時代に始まる大型集落であったことを知ることができる。

一方、南に接する東弓削遺跡は、弥生時代中期に始まり、古墳時代・奈良時代・平安時代を経て鎌倉時代に統く複合遺跡として知られているが、実態について詳細な調査と記録はない。

今回の調査地はこの2遺跡の接する地点でもあって、南北に連なる両遺跡の性格を解明する上からも関心のもたれる地点である。



調査地周辺図

本調査に先立って行われた試掘調査の結果から、表土より遺物包含層上面（約1.70m）までを機械掘削し、その後手掘りによる調査を行った。機械掘削は建設工事の工程に従って進行し、手掘り作業は順次それに従って行った。

記録は、写真・実測などによって作成された。調査区の基本層序は、表土直下に淡黄褐色砂層があり、以下暗青灰色粘土・淡灰褐色土・黄灰色土・淡青灰色粘土と続く。遺物包含層はこの下の暗灰色粘土層である。

西から東へ任意の地点にA～Dグリッドを設け、調査区外にもEグリッド1箇所を設定した。この結果、A～CとEは包含層のみであったが、Dでは造構が検出されたため、南北に拡張した。調査区中央部西寄りでは、機械掘削面に造構があらわれた。そのため、この地点から造構の存在する可能性の高い東方向へトレンチを入れて精査したが、小土坑が1箇所検出されたのみであった。トレンチ東端から北へ拡張した部分に、池沼状の落込み端部を検出した。造構面上下の地層の状況は、青灰色粘土層を遺物包含層とし、その下の淡青灰色砂質土層上面に造構があり、同層はまた遺物包含層でもある。この層より下は、植物遺体を含む洪積期層となっている。

検出造構は土坑4基・焼土坑2基・池沼跡1箇所、遺物は中期～後期の弥生式土器（壺・甕・高杯他）や庄内式土器（壺・甕・高杯・鉢他）などが、コンテナに4箱程度出土している。



## 9 跡部遺跡

社員寮建設に伴う発掘調査

委託者：津田治

調査地：跡部本町2丁目46他

調査面積：500 m<sup>2</sup>

調査期間：昭和59年3月1日～3月31日

跡部遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川左岸の自然堤防上に立地している。周辺には、同様の立地条件で、植松遺跡・太子堂遺跡・亀井遺跡が近接している。また、遺跡の範囲内には、渋川庵寺の推定地が含まれている。

当調査地では社員寮建設に先立ち、昭和59年1月に八尾市教育委員会による試掘調査を実施した結果、表土下0.30～0.60mで中世の遺物包含層を検出したため、建設予定部分に対して全面発掘調査を実施した。

調査は第1トレンチ・第2トレンチの2箇所に分けて行ったが、両トレンチとも表土下0.40～1.00m (TP +8.80m) の黄褐色疊混粗砂層上面で中世の遺構面に達する。この面は調査区中央部が高く、東西の端が低くなっている。検出遺構は、井戸2基・土坑19基・溝2条・小穴群などである。



調査地周辺図

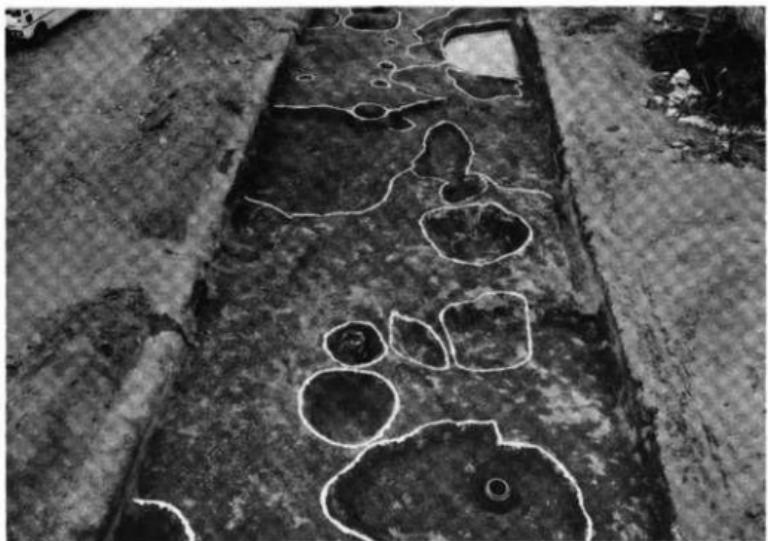
井戸は第2トレンチ西側で検出したもので、羽釜を重ねて井筒としており、内部から土師質皿・瓦器碗などが出土している。

土坑は、第1トレンチで6基、第2トレンチで13基検出した。第1トレンチの土坑1は長径200cm・短径150cmの梢円形の掘込みで、深さ40cmを測る。土坑内部の下層からは、鎌倉時代に比定できる瓦器碗が、完成品に近いものを含めて数個体出土していることから、土塙墓である可能性も考えられるが性格は不明である。第2トレンチで検出した土坑は径120～150cm程度のものがほとんどで、いずれも梢円形または隅丸方形を呈する。深さはいずれも40～50cmと一定で、第1トレンチの土坑1と同様の性格のものと考えられる。

溝は第1トレンチで東西方向のものと南北方向のものを検出した。いずれも15～20cm程度の深さをもつ。

小穴は、第1トレンチ東半分で60個、第2トレンチ中央で7個を確認した。これらの中には、東西・南北に一直線に並ぶものもあり、建物の柱穴の可能性が考えられる。

その他の遺構としては、第1トレンチの北西部で、土師質皿の集積を検出した。これらは、梢円形の穴を掘って埋納しており、数は完成品だけでも65個体におよぶ。また、第1トレンチの南西端は極端に落込んでいるため、ここより南西に大きな溝・地状の遺構などが想定できる。



## II その他の事業

### 1 環山樓の公開（八尾市教育委員会からの委託業務）

#### (1) 週2回の公開

毎週月曜日・木曜日午前10時～午後4時

昭和58年度 102日公開 入場者合計1157人

#### (2) 催物のための公開

①「八尾まつり」に協賛しての公開

昭和58年9月18日(日)

②「八尾に残る江戸時代の建築物」—環山樓修復記念特別展—

昭和58年11月19日(土)・20日(日)

#### (3) その他の要請に応じての公開

①「春季史跡めぐり」（自治推進課主催）

昭和58年5月22日(日)

②「第30回八尾市民文化祭茶道大会」（中央公民館主催）

昭和58年11月12日(土)・13日(日)

③「河内木綿同好会」（河内木綿同好会主催）

昭和59年3月27日(火)

### 2 講座

#### (1) 文化財講座

①「大阪湾沿岸の弥生文化」 講師 村川行弘氏（大阪経済法科大学教授）

昭和58年5月9日(月) 教育センター集会室

②「弥生時代の葬制」 講師 田代克己氏（帝塚山短期大学教授）

昭和58年10月8日(土) 教育センター集会室

③「環山樓と江戸時代の建築物」 講師 櫻井敏雄氏（近畿大学教授）

昭和58年11月19日(土) 環山樓

④「応神天皇と成人儀礼」 講師 塚口義信氏（堺女子短期大学教授）

昭和59年1月21日(土) 教育センター集会室

(2) ちびっこ文化財夏期学級 昭和58年7月21日～25日

日程・講義内容 講師 奥田尚（八尾市立刑部小学校教諭）

7月21日(木) 開講式・「石器の話」 教育センター集会室

7月22日(金) 「土器の形」 教育センター集会室

7月23日(土) 「古墳の話」 教育センター集会室

7月24日(日) 高安古墳群見学

7月25日(月) 「埴輪の話」・閉講式 環山樓

3 発掘調査現場の見学会

(1) 八尾南遺跡現地説明会

昭和58年5月28日(土)

(2) 小阪合遺跡現地説明会

昭和59年2月18日(土)

4 図書の刊行

(1) 「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要」～昭和55・56年度～

『(財)八尾市文化財調査研究会報告3』 昭和58年8月

昭和55・56年度に、八尾市教育委員会が実施した発掘調査の内業整理・報告書作成を当調査研究会が引き継いで実施したもので、宮町遺跡(千眼寺跡)・水越遺跡・大田川遺跡の概要報告を集録している。

(2) 「木の本遺跡」～八尾空港整備事業に伴う発掘調査～

『(財)八尾市文化財調査研究会報告4』 昭和59年3月

昭和57年7月から発掘調査を実施したもので、八尾空港内に所在する志紀郡条里制および平安時代の集落についての概要報告

5 その他

(1) 「第1回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会の協賛および参加

昭和58年10月15日(土)・16日(日) 中之島中央公会堂

(2) 八尾市教育委員会主催の資料交換会に参加

昭和59年2月18日(土) 教育センター会議室

八尾市内で発掘調査を実施している団体との情報交換を目的とする。

## 昭和58年度事業概要報告

(財)八尾市文化財調査研究会報告 5

編集 (財)八尾市文化財調査研究会

〒581 八尾市清水町1丁目2番1号

0729-94-4700

発行 昭和59年4月

印刷 株式会社 やえの里タイプ

